

# 交流を広げるために

近畿大学総合社会学部教授 久 隆浩

## 1 話すと聴く

交流会をしても交流が生まれないのはなぜ？

話す／ 聴く

交流には「聴く」ことが大事

発信者 → (情報) → 受信者

情報が伝わる鍵は受信者が握っている

オープンキャンパスの「相談コーナー」 ↔ 説明コーナー

グループワークで、聴き役のはずがいつの間にか説教に

コミュニケーションや信頼は「聴く」ことが基本

話を聴いてくれる人に信頼感を感じる

相手の話をよく聴いて、それ自分の話を重ねる = コミュニケーション

## 2 ネットワークの必要性

本当にネットワークが必要？

自分に都合のいいネットワークを望んでいないか？

自分がして欲しいこと／ 相手がして欲しいこと

give and take、お互いさま

「まちづくり井戸端会議」の成否から考えること

テーマがさまざまだと話が進まない？

聴きたくない話題は時間のムダ？

用事のあるときは来るが、用事が済むと来なくなる

環境分野の交流会か、異分野の交流会か

一見、同じ分野の人どうしのほうがうまくいくように思える

違う分野の人の話にヒントがあるが…

違うから補い合える

目的が明確になれば、その目的に合致した人ばかりの参加になる

### 3 実践コミュニティ育成の7原則

Etienne Wenger他 『コミュニティ・オブ・プラクティス ―ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』

#### ① 進化を前提とした設計を行う

コミュニティの立ち上げや発展を図る際に、メンバーが従来有していた人脈を使うことが多い。「コミュニティを無から作り上げるというよりは、むしろ発展を導くことの方に近い」「コミュニティは発展を遂げるために、メンバーが以前から持っていた個人的な人脈を活用することが多い。」

#### ② 内部と外部それぞれの視点を取り入れる

コミュニティを発展させるためには内部の視点と外部の視点それぞれが必要である。コミュニティやメンバーの状況を的確に把握するためには内部の視点が、また、コミュニティの状況を評価したりコミュニティ外の情報を収集するためには外部の視点が重要である。

#### ③ ささまざまなレベルの参加を奨励する

コミュニティ・メンバーをコミュニティへの貢献度によって整理すると、まずは、イベントを計画しメンバーを結びつける「コーディネーター」がいる。続いて、コミュニティの公のフォーラムで行われる議論に積極的に参加する「コア・グループ」がある。「コミュニティが成熟するにつれ、コア・グループはコミュニティの指導的役割を引き受け、コーディネーターの補佐役を務めるようになる。」「通常このグループは小さく、コミュニティ全体の人数の10から15%を占めるに過ぎない。」

さらに、「アクティブ・グループ」が存在する。「このグループに属する人々は定期的に会合に出席し、コミュニティのフォーラムにも時折参加するが、コア・メンバーほど規則正しく熱心に参加するわけではない。」「人数で言えばコミュニティのもう15から20%を占める。」そして、「コミュニティの大半は周辺メンバーで、めったに参加しない。彼らは傍観者に徹し、コア、アクティブ・メンバーたちの交流を見守っている。」「一般的なミーティングやチームでは、このような中途半端な関与は奨励されていない。だがこうした周辺的な活動が、実践コミュニティでは重要な特質となっている」

「コミュニティの参加の質を高め、レベル間の適切な行き来を促すための鍵は、どのレベルの参加者もフルメンバー(正会員)のような気持ちになれるように、コミュニティの活動を設計することだ。」と指摘している。

#### ④ 公と私それぞれのコミュニティ空間を作る

「コミュニティ設計でよくある過ちは、公共イベントに重点を置きすぎることだ。コミュニティのコーディネーターは、会合と会合の間の私的な時間を活用しなくてはならない。」コミュニティ活性化のためには、公式の会合だけでなく、私的なコミュニケーションも重要である。じつは、公式の会合がうまくいくかどうかは会合と会合の間にどれほど緊密な私的コミュニケーションが図られたかにかかっている。コーディネーターはメンバーに頻繁に接触し、現在抱えている問題や想いをつねに聞きだし、次の会合の話題に想いをめぐらせておかなければならない。場合によっては、次回の会合に出そうな話題にふさわしいメンバーに出席を請うことも必要になる。

また、公式の会合が契機となって新しい私的ネットワークが形成される。ある実践コミュニティのコーディネーターは次のように語っている。「だれとだれが連れ立って部屋から出ていくか、だれが部屋に残って話をしているかを見るのは楽しみですね。新しいつながりがたくさんできればできるほど、良い会合だったということが分かるんですよ。」

## ⑤ 価値に焦点を当てる

メンバーがコミュニティに継続的に関わっていくかどうかは、各人がコミュニティに価値を見出しているかどうかにかかっている。関与する価値があるからこそ人々はコミュニティに参加しつづけるのである。しかし、この価値は画一的なものではない。人それぞれに感じ方が異なる。領域が自らの関心事と重なり、参加を通じて自らの課題が解決されたり、発想が広がることに価値を見出す人もいる。また、コミュニティ、つまり、集まって歓談することそのものに価値を感じている人もいる。さらに、他のメンバーと実践を共有できることに価値を見出す人もいよう。積極的に発言はしないが参加し続けている人は、他のメンバーの話聞いて学習している可能性が高い。このように、参加者一人一人が多様な価値を感じられるコミュニティを設計することが肝要である。

## ⑥ 親近感と刺激とを組み合わせる

「実践コミュニティは、レイ・オルデンバーグが日常の仕事のプレッシャーから離れた「中立的な場」と呼ぶものにあたる。コミュニティのメンバーは、チームのメンバーとは違って、助言を提供してもプロジェクトに巻き込まれる恐れはない。また助言に耳を傾けても、それを受け入れる義務はない。」こうした気軽さ、気の置けない関係がメンバー間に親近感を生み出す。しかし、過度の親近感は馴れ合いやマンネリにつながる恐れがある。そこで適度な刺激がつねに必要となる。たとえば、新しいメンバーが加入することがひとつの刺激になる。また、刺激を得るためにゲスト・スピーカーを招聘することも効果的である。

## ⑦ コミュニティのリズムを生み出す

日常生活がリズムカルに行われることによって安定した生活が送れるように、コミュニティにも一定のリズムが必要である。定例的な会合を催すことはコミュニティにリズムを生み出す。しかし、会合の頻度が多すぎると息切れがしてしまうし、逆に、頻度が少なすぎると間延びをしてしまう。それぞれのコミュニティにふさわしい適切なリズムを見出さなければならない。